月刊

こころのとも

第十三巻
七月号

エゴ追求社会の帰結

いま
世界中で
民族主義
ナショナリズム
極右の
国粋主義
ファシズムなどの
風が吹き荒れている

それは
自己社会
エゴ追求社会の
必然の帰結

子どもの睡眠の乱れ

子どもたちの睡眠が
宵っ張りで
朝寝坊型になり
睡眠時間も
短くなっている
という

それは
生活習慣の乱れ
他己の喪失の
現れである

人生を考え直して

みたい人は（一〇三）

―空海『即身成仏義』解説（六）―

（三）二頌（じゅ）八句の総釈と科分

釈して曰く、この二頌八句を以て即身成仏の四字を歎ず。即ち、この四字に無辺の義を含ぜり。一切の仏法は、この一句を出でず。故に、略して両頌を樹（た）てて無辺の徳を顕（あら）わす。

頌の文を二に分かつ。初めの一頌は、即身の二字を歎じ、次の一頌は、成仏の両字を歎ず。

初めの中に、また、四有り。初めの一句は体（たい）、二には相（そう）、三には用（ゆう）、四には無礙（むげ）なり。

後の頌の中に四有り。初めには法仏の成仏を挙げ、次には無数（むしゅ）を表わし、三には輪円を顕わし、後には所由（しょゆ）を出だす。

参考までに、現代語訳として『弘法大師空海全集第二巻』（筑摩書房刊）の中の松本照敬訳を引用させて頂きます。

「―――＊―――＊―――＊―――

右の詩を解釈していう。この二つの句は、「即身成仏」という四文字を賛（たた）えたものである。すなわち、この四文字には、かぎりない意味が含まれている。すべての仏教の教えは、この「即身成仏」の一句に表現されており、これを出るものではない。そのゆえに、略して二つの詩をあげて、かぎりない徳を表したのである。

詩の全体を二つの部分に分ける。初めの一詩は、「即身」の二字を賛え、次の一詩は「成仏」の二字を賛える。

初めの詩に、また、四つのことが説かれている。最初の句には、即身の本体、二番目の句には、即身の真実相、三番目の句には、即身のはたらき、四番目の句には、即身の自由自在な交渉が説かれている。

あとの詩にも四つのことが説かれている。最初の句に、宇宙の真理そのものたる仏の成仏をあげ、次の句においては、無数の人びとを表わし、三番目の句は、世界の真実相を表わし、最後の句には、成仏の理由を示している。

―――＊―――＊―――＊―――」

出だしにあります「右の詩を解釈していう」の右の詩とは、先月号に載せました八行からなる詩のことです。大切ですので、次に再掲してみます。覚えてしまうほ

ど読んで頂ければと思います。

六大無礙（むげ）にして常に瑜伽なり　体
四種曼荼各々離れず　相
三密加持すれば速疾に顕わる　用（ゆう）
重重帝網なるを即身と名づく　無礙
法然に薩般若（さはんにゃ）を具足して
心数（しんじゅ）・心王、刹塵に過ぎたり
各五智・無際智を具す
円鏡力の故に実覚智なり　成仏

お読み頂ければ、これまでの解説もあり、大体、意味はお分かりだと思います。少しだけ、解説しておきます。

即身成仏には限りない意味が含まれており、「すべての仏教の教えは、この「即身成仏」の一句に表現されており、これを出るものではない」とあります。なぜなのでしょうか。

これまでの解説の中に、「五分法身とは戒・定・恵・解脱・解脱知見なり」というのが出てきたと思います。これは、①身を浄めるために戒律を守り、②瞑想・精神統一するために禅定（ヨーガ）に励む、③そうしているとき、単なる「知識」ではない、直観的な「智恵」を得ることができる、④そうした智恵を得る修行を重ねていけば、解脱に至れる、⑤そうすれば、一々の生活上の問題場面で、解脱に基づく知見（＝解決法）を得ることができる、というものです。

仏教が目指すものは、自らの苦を脱して、安心立命・大楽に至り、それによって、他者を救済する（自分と同じ境地に導く）ことです。一言で言えば、「上求菩提・下化衆生」です。それを歌にしたものが、次のものです。

人多き　人の中にも　人ぞなき
人になれ人　人になせ人

この仏教の目標を達成するためには、自らが真の人に成る（＝即身成仏する）ことが必要なのです。

ところが、この民主主義の時代に生きる現代人にとっては、他を制することや環境を制御することは知っていますが、自らを制する「自制」とか、節度をもって自己を制する「節制」といった言葉は、まったく死語になっています。でも、自らが「大楽＝真の幸福」になったり、他者を「大楽＝真の幸福」にしたりするためには、実は、この自己をコントロールすることが、不可欠なのです。

実は、この自己コントロールの極致が、即身成仏に至ることだ、と言えるのです。その境地は、現代語訳にもありますように、まさに「自由自在」と言えるものです。

本文の言葉で言いますと、「無礙」なのです。
ですから、この即身成仏に至りますと、現代語訳にありますように、「かぎりない徳」が備わる、ということになるのです。
ここで、徳とは何か、少し本題からそれますが、解説しておきたいと思います。
この『こころのとも』第八巻（平成九年）四月号でマタイ福音書を解説した際、老子の主張を引用しています。それは、『老子』第三十八章で「道を失って而る後に徳あり、徳を失って而る後に仁あり、仁を失って而る後に義あり、義を失って而る後に礼あり」という部分です。ここに出てきます、老子の道は、弘法大師空海では即身成仏の境地のことです。ですからこの道の境地に至りますと「かぎりない徳」が備わるということになるのです。
老子で言いますと、徳とは、礼、義、仁のすべてが実現された状態を言います。なお、私のモデルでは、礼は「感覚―運動」の働きとして、義は「認知―言語」の働きとして、仁は「情動―感情」の働きとして、それぞれ実現される価値です。そして、それらは、すべて意識領域に属します。
無意識領域で、即身成仏が達成されますと、意識領域で為すあらゆる精神の営みに徳が備わるということです。

自作詩短歌等選

日本丸の行く末

銀行のシステム障害が
なぜ起こるのか
行政マンの士気が
なぜ低下するのか
政治家のスキャンダルが
なぜ頻発するのか
企業のモラル・ハザードが
なぜ起きるのか
教育が
なぜ荒廃するのか
学力水準が
なぜ落ちるのか
若者の心が
なぜ世界一荒れるのか

日本にだけ引きこもりが
なぜ起こるのか
自殺者が
なぜこうも多いのか
犯罪が
なぜ凶悪化するのか
犯罪検挙率が
なぜ二割なのか
日本は
なぜ衰退していくのか

目指すべき港も分からず
人生の羅針盤と灯台とを
失って
航行する
日本丸の行く末は
どこまでも危うい

自分の内を探そう

近代・現代人は
自分の外ばかり
探してきた

でも
いまやそれは
人類に破滅を
もたらしつつある

民族・宗教観の対立激化
真の信仰の消滅
家庭の崩壊
地域社会の消失
社会規範の喪失
地球環境の破壊
などなど

これから先は
自分の外ではなく
内を探そう
そうすれば
財産はなくても
名声はなくても
自ずと幸せが
訪れてくるから

真の幸せは
自分の内の
暗いところに
あるのだから

先進国の落胆

自助努力
する国だけに
援助する
やがて儲けが
転がり込むから

環境を大切に

中国では
毎年
神奈川県一県が
砂漠化していて
緑化が追いつかない
という
原因は
山林の開発や
放牧による土地の荒廃
だという

日本にも
韓国にも
今年は
過去にない
大量の黄砂が
飛来した

地球は有限
環境を大切にしよう

日本・信を喪失した社会

日本ほど
社会崩壊が
進んだ国はない
日本では
家族や隣人すらが
いつ自分への
加害者に変わるか
わからない
だから
自分の安全を
護ることが
人生の最重要課題と
なる

誰も信じられない社会
「信」を喪失した社会
その根本原因は
信仰を喪失したから
でも
誰もそれに気付かない

精神的ゆとりのなさ
フランス人は
食事を楽しむ国民だ
という
でも
グローバリゼーションの
おかげで
道を歩きながら
サンドイッチを食べる
若者たちの姿が
日常化している
という

フランスだけではない
日本でも同じこと

世界中が
食文化さえ
せかせかとした
ゆとりのないものに
なっていく

これも
アメリカ文化の
悪影響

教育復興の決め手
教育復興の決め手は
日本のよいところを
教えて
自国への
アイデンティティーを
確立することだと
主張する人がいる

ナショナリズムを
煽ったぐらいで
教育は
よくならないぞ

かえって
危険なだけだ

自作随筆選

農業は魅力ある職業！？

六月二十七日付け毎日新聞の「ひと」欄に、「農業は魅力ある職業　確かなものにしたい」と題して、土門秀樹という方（四十五歳）が紹介されていました。見出しに魅力を感じて、すぐ読んでみました。

この方は、東京大学を卒業されて、農水省に入省され、エリートコース（キャリア官僚）の道を歩まれていたようですが、農業の現場に魅力を感じられて、退職され、奥さんと共に山形県遊佐（ゆざ）町で、米と花類を主に、専業で農業を営まれています。とてもユニークな方のようです。

この方の農業の現状認識はとても的確で、「いわゆる専業農家は絶滅寸前。新規就農はとても人に勧められない」とか「いま農業は時給５００～１０００円の世界」とか「最初に育てたオクラの収入を時給換算してみたら、たった２００円だった。これでは外で働かないと暮らせない。農業を始めた時、集落に10軒あった専業農家が、今では３軒」とか、書いておられます。私も、これは本

当だ、と実感できます。

この方が言われますように「農業は国民の命と暮らしに密接に係わる」「魅力ある職業」だと、私も思いますが、では、絶滅しそうな農業を復活する道は、どこにあるのでしょうか。期待して読みましたが、でも、失望させられました。

なぜなら、この方の解決策は、農業従事者を「医師や教師のように、国家試験で安全な食べ物を国民に届ける『農師』」として資格認定する制度を作ればよいというものだったからです。

なるほど、東京大学を卒業され、エリート官僚だったような方は、何かにつけて「試験」で人に特別な資格を付与するのが、お好きなのでしょうが、でも、そんな制度を作ったぐらいで、農業が再建できるとはとても考えられません。「農師」が生産したものだから安心で、その人の生産品に特別な付加価値をつける、といったことは、だんだんと「信」が失われていく民主主義社会のいまでは、到底、期待できないのです。また、たとえ「農師」が難しい試験で、それに合格すれば、そのことだけで尊敬され、自分もプライドをもって立派な仕事をすると、期待されるのかも知れませんが、もし、そうした難しい試験を通っても、たいした所得が得られなければ、試験を受ける人すら出てこないのだと思うのです。

たとえば、もし国家試験を通った医師でも、低い所得しか得られなければ、誰もする人がいなくなるのではないでしょうか。なぜなら、医師の仕事（例えば外科）も、人に嫌われる３Ｋを備えている、と考えることができます。つまり、医師の仕事は、血を見たり、触ったり、あるいは死体を処理したりといった、ある意味では「きたない」仕事ですし、また、深夜にもたたき起こされる「きつい」仕事で、かつ重い責任を負わされる「きけんな」仕事ということになるのではないでしょうか。

こうしたことが、この方には、お分かりになっておられないようです。

今日のように、経済行為の目的が、「利益と選好の追求」とされ、かつ、それが「合理的行動」だとされる資本主義経済制度・自由主義経済制度の下では、食料品も商品ですから、生産品の売価によって利潤が決まり、それによって生産意欲の強弱も決まってくるのです。価格が高く、利益があがれば誰もが生産したがりますし、逆に価格が安く、利益が出なければ、生産を止めてしまいます。北海道で20ﾍｸﾀｰﾙの農地をもつ米の生産農家が毎年、五百軒も離農していく現実は、米価が下がり、赤字が続くことで、引き起こされているのです。

まさに、日本の農業は「農産品を作ることそのこと」が好きで、それに生き甲斐を感じる人か、あるいは、先祖から引き継いでこれまでやって来たことを今さらやめられない人が、利益を度外視してもやり抜こう、あるいはやらざるを得ない、その「生き方」に依存しているように、私には思えます。しかし、そうした生き方は、若い人には殆ど理解されませんし、また、それを多くの人に期待するのも現実的ではありません。ですから、利益のあがらない農業が、どんどん衰退していくのは必然の帰結だと思われます。

では、こうして八方塞（ふさ）がりの農業を復活させる道は、どこにあるのでしょうか。

私には、それは、完全な自由経済をやめて、国家政策によって農業に何がしかの統制・保護を加えることだと思われるのです。

例えば、その第一の道は、農産品を初めとして第一次産品を、徐々にでもいいのですが、貿易禁止にすることです。少なくとも輸入を禁止することです。そうすることで、たとえ国際的に非難の声があがり、日本の工業製品の輸出量が減り、経済が停滞しようとも、です。

そうした貿易禁止を実行すれば、今日のように食糧の海外依存度の高い日本では、必然的に食料品が不足し、その値段は現在の何倍、何十倍にもなることだと思われます。そうなれば、農業希望者はきっと増えます。かつて、米は輸入禁止でしたが、いまや、高い関税をかけているとはいえ、自由貿易になっています。ですから、需要の減少もあって値段は徐々に下がっています。そのうち国際的な圧力によって、関税率は引き下げざるを得ないのではないでしょうか。

私の持論ですが、農業・漁業・林業などの第一次産業は、土地に依存しています。そして、そうしたものは、人間の生存に不可欠のものです。ということは、人間は、そもそも、土地に依存してのみ生命の維持が可能だということなのです。ですから、土地に依存した生活必需品は、その土地で生産できたものでまかなうべきなのです。そうしないと、人類はさまざまな理由で（ここでは述べませんが）、常に滅亡の危機に直面しなければならなくなります。自由貿易による世界規模での分業からは、農業は除外すべきなのです。人間が平和で安定し安全に生きていくためには、それが不可欠だと思うのです。

次に、農業を復活させる第二の道ですが、それは、農業経済に統制を加える代わりに、農家を直接保護する方法です。自由経済のいま、一般に世界中で行われているのはこちらです。でも、日本では、経済原則が優先して、

市場原理にまかせるべきだという議論が優位を占め、保護は行われていません。

こうした事情を反映して、日本の農業、いや、林業も、先進国中で（世界中かもしれません）、一番、崩壊しているのだと思うのです。

ここまでは、主として農業を食糧供給の面から検討して来ましたが、農業は、単に、それだけの働きをするだけではありません。私は、農業は人びと、特に子どもを自然とかかわらせることで、人間が生きるとはどういうことなのかを体験させる絶好の機会を提供するものだと思うのです。自然と触れ合い、自然に対して関心をいだかせることができますし、また、大人と共に労働することで、労働とは何か、大人はどのように労働しているのか、を身をもって体験さすことができます。また、家族が共に労働することで、家族としての一体感を高めることができるのです。百姓に資格などいりません。農業は、自らが生きることそのことなのです。ですから、できればあらゆる人が、自給のための農業を体験すべきなのです。その体験によってわれわれ人間は、自然と共に生きている、ということを知る機会をもつことができます。

こうした体験を可能にする社会制度を作ることも、農業を復活させる道なのです。

釈尊のことば（一一三）

―法句経解説―

（三五五）彼岸にわたることを求める人々は享楽に害（そこな）われることがない。愚人は享楽のために害われるが、享楽を妄執するがゆえに、愚者は他人を害うように自分をも害う。

「彼岸にわたる」とは、弘法大師空海で言いますと、即身成仏、仏教一般で言いますと解脱、ということになります。釈尊の弟子である仏教僧は、少なくとも、それを求めているはずです。ですから、それを「求める人々は享楽に害われることがない」ということにならなければなりません。ところが、今の日本では、「害われることがない」と断定的に言い切ることはできないのが、残念ながら、僧侶の現実です。ですから、「害われてはならない」と改めなければなりません。

次に、「愚人は享楽のために害われる」とありますが、前述の通り、僧侶もそうなっています。

テレビに度々出演している、ある僧侶は、高級車に乗り、銀座の高級バーに夜な夜な飲みに行く、ということで、ある外国人から不思議がられましたが、「これが私

の生き方で、他人からとやかく言われる筋合いはない」といったと言います。

釈尊の弟子でありながら、この偈（教え）が全く分かっていないようです。

その方は、「享楽を妄執するがゆえに、愚者は他人を害うように自分をも害う」ことになっています。つまり、自らは堕落することで僧侶の資格を害い、傷つけていますし、また、他者に僧侶への信頼の念を失わしめ、宗教への人びとの態度を悪いものにしています。

「これが私の生き方」なぞと、うそぶくひまがあれば、僧侶の生き方は、「私を捨てたところにしかない」ことに思いをいたさなければなりません。

ところで、僧侶に限らず、享楽への妄執は、現代人には生き甲斐追求の重要な条件となっています。

度々書いてきたことですが、現代の資本主義・民主主義は、自己追求の制度で、その追求の目的は、自己の利便性・快適性・享楽性（エンジョイすること）です。別の言葉で言えば、自己の利益と選好の追求です。

最近のアンケート調査でも、若者たちの生きる目的は、「楽をして」「楽しく暮らすこと」だったといいます。つまり、人生をエンジョイ（享楽）することが、人生の目的だと思っているのです。嘆かわしい限りです。

この偈では、享楽へ執着することで「愚者は他人を害うように自分をも害う」といっていますが、なぜなのでしょうか。僧侶のように自制・節制することが求められている職業では、享楽へ執着してはいけないことは、分かるけれども、一般の人までが「享楽が他者を害い、自分も害う」ということは言えないのではないかと、思われるかもしれません。おそらく享楽追求を生き甲斐とする現代人には、全く理解しがたいことだと思われます。

でも、そうなのです。極端な例かもしれませんが、例えば、多額の不労所得（利子、配当、家賃、地代など）や、一般人より極端に高い所得を得る人は、こつこつ、まじめに働く必要はなく、高級住宅地に贅沢な邸宅を建てた上、別荘まで持ち、高級外国車に乗り、港には大型のヨットやクルーザーを係留し、夜の市長とよばれるほど夜の町を徘徊し、好きな人はギャンブルにも興じて、人生を楽しんでいます。

こんな人は、正に人生をエンジョイ（享楽）していると言えますが、でも、そうした人たちは、自らを害い、他者を害っているのです。なぜなのでしょうか。

こうした、遊びに耽っている人々は、健康を害するという、まさに目に見えて自らを害うことがありますが、ここで言っているのは、そんなことだけではありません。

それ以外に、もっと人間として自分を害っている、と言っているのです。

この点が現代人には、まったく理解できないのです。人間は、「真の幸せ」に至るためには、享楽していてはだめなのです。享楽することで、真の幸せから遠ざかっているのです。自らの真の幸せを害しているのです。それなのに、そうした享楽・堕落に気付かず、自分の不幸を嘆き、他者を責め、他者を不幸にさえするのです。

人間が真の幸せに達するためには、自己と他己、二つの人生の基本命題（目標）を自覚すると共に、それらを実現しようとし、同時に、二つの命題を統合すべく精進しなければならないのです。その命題は、次の二つです。

自己の側の基本命題（目標）
人間は自分自身を知ることを目指して、
より善く生きようとする存在である。

他己の側の基本命題（目標）
人間は法を目指して、
より善く社会的であろうとする存在である。

まず、自己の側の命題ですが、人間は、自分自身を知ることを目指して生きる存在なのです。これは、そうしないと、人間としての意味、あるいは存在意義を失うという意味で、基本命題なのです。

現代人のように、享楽を生き甲斐としていては、自分自身を知ることは、不可能なのです。

また、享楽することを、私の心理モデルで言いますと、それは、「自己」の「情動」への執着を表しています。ということは、他己の側の命題である「法を目指す」ことを見失っていることを意味し、社会的であることを放棄していることを意味するのです。

それは、自らを害うことは勿論、他者を害っているのです。

国として、最も経済的に豊かなのは米国ですが、最近のこの国の大統領の言動を見ていますと、まさに享楽を第一の目標にしているようにしか思えません。世界には、多くの貧困な人々がいます。飢え死にしている人も「ゴマン」といます。「人間」であれば、当然、手を差し伸べるべきなのですが、自国の国益を主張して、放置したままです。他己が麻痺しているとしか思えません。

「他者を害っている」のです。勿論自らも害っています。リンゴのように中からだんだん腐敗して行くのです。

後記

一、雨台風が襲来しました。被害がかなり出たようです。経済大国で文明国だというのに、災害に弱い国・日本の面目躍如です。

二、毎日のように畑に行きます。キュウリがどんどんできます。毎日沢山食べています。よそ様へ差し上げるのですが、おいつきません。トマト、ナスも、結構、取れています。でも、雑草も一日一日みるみる伸びてきます。

三、インターネットのホームページへのアクセスが、増えてきたようです。ありがたいことです。読者の方でまだの方は、どうぞアクセスしてみて下さい。『こころのとも』も出していますが、それ以外にも、「ライブラリー」や「ひびきのさとだより」もあります。また、論文も徐々に全文が見えるようにしていきつつあります。小川敦君が、いろいろ努力して進歩させてくれています。

四、ホームページを見て、資料を請求して来る方も、増えてきたように思えます。ありがたいことです。

五、かつて本誌に連載しました『老子』の解説を、大学の紀要に連載して二回載せました。結構、皆さんの関心が高いのか、資料集に載せたいとか、出版したい（ただし自費出版に近い費用がかかる）とか、そういう申込みがありました。出版社の負担で出して頂けたらと思うのですが、今は出版にはかなりのリスクがあるようで、なかなか、そうはいかないようです。

六、この頃では、出版しなければならないとは思わなくなりました。儲けたいとか有名になりたいとか野心はありませんので、費用のかからないホームページで、人びとが幸せになれるような情報（哲学・思想など）を、少しでも公開していけたらと思っています。あと一年半余りで、大学を定年退職しますが、その後も、世界に向けて、情報発信の基地として存在できたらと考えています。

七、その名称も仮ですが、「ひびきのさと人間精神学研究所」でどうだろうか、などと思ったりしています。

月刊　こころのとも　第十三巻　七月号　（通巻　一五一号）

平成十四年七月八日
〒７７２―８５０２
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０